

相互コラージュ・ウォッチワード・テクニクの試み(2)： SD法を用いた測定

串 崎 真 志

I. はじめに

ウォッチワード・テクニク (watchword technique：以下WTと略記) は、ユングの言語連想法を背景に開発した自己発見技法であるが (Daniels, 1996, 2004；串崎, 2004)、筆者はセラピストとクライアントの相互性を加味した「相互ウォッチワード・テクニク」(mutual watchword technique：MWT；串崎, 2007) を開発し、さらにそれをイメージによって行う「相互コラージュ・ウォッチワード・テクニク」(mutual collage watchword technique：MCWT；串崎, 2009) に発展させた。

このMCWTでは、主たる技法が言語からイメージに移行しただけでなく、作品の解釈もユング心理学的な象徴解釈から、間主観的意識 (intersubjective consciousness；Stern, 2004) による共同生成 (cocreate) の重視へと変化している (注1)。またMCWTの制作過程が、臨床場面でクライアントに生じるプロセスと近似していることから (注2)、串崎 (2009) では、MCWTを実習に取り入れることで心理学専攻生の臨床感覚を促す可能性を示唆した。しかし間主観的意識や、それをもとにした二人の間主観的關係 (注3) が作品にどのように影響するかは明らかでなかった。そこで本研究では、SD法による評定を用いて、コラージュを単独制作する場合と比較しながら、MCWT作品の特徴を検討したい。

II. 方法

臨床心理学を専攻する大学院生6名 (女性4名、男性2名) に協力を依頼し、本研究について承諾を得た。時期は2009年4月であった。あらかじめ単独で制作したコラージュを持参してもらい、串崎 (2009) にしたがってMCWTを授業中に集団実施した。ペアは任意の組み合わせで、模擬的にセラピスト役とクライアント役になって実施した。制作後に自分の作品 (単独コラージュとMCWT) について、それぞれSD法で評定した。SD法は、永山 (2009) の尺度から因子負荷量の高い20項目を選び、視覚的アナログ評定として、形容詞対を結んだ線分上にチェックを入れる形で実施した。線分の左端からの距離 (mm) を評定値とした。

III. 結果

永山 (2009) が見いだした因子にならって、「安心した－不安な」「快い－不快な」「居心地のよい－居心地の悪い」など5項目の合計を「居心地」、「活発な－不活発な」「動的な－静的な」「すばやい－のろい」など5項目を「活動性」、「重い－軽い」「深い－浅い」「広い－狭い」など5項目を「没入感」、「精密な－粗雑な」「健全な－不健全な」「一定の－不定の」など5項目を「まとまり」の得点とした。なお少数事例につき、統計的検定は行っていない。

事例Aの単独コラージュ (AS)、Bと共同制

作したMCWT (AM)、事例Bの単独 (BS) 及びMCWT (BM) についての結果を図1に示した。同様に、事例CDについての結果を図2に、事例EFについての結果を図3に示した。なお、グラフの表示は数値が大きいほどその傾向が低いことを現している。作品例として、巻末に作品AS, 作品AM, 作品ES, 作品EMを示しておこう。

IV. 考察

まず、ASとAMのラインを比較すると、ある程度の相似がみられる (事例BCDFについても同様、Eは例外)。このことから、同一人物の作品は、単独/共同にかかわらず基本的に似ていて、個人の表現はそれぞれある程度一貫していることが伺える。

それをふまえたうえで、事例Aを見てみよう (図1)。「居心地」の数値はASよりもAMにおいてやや小さくなっている (数値が大きいほどその傾向が低い)。このことは、Aが単独コラージュよりもBとの共同制作において、作品の「居心地」を少しよく感じたことを意味する。ここで、相手Bの単独コラージュ (BS) を見ると、「居心地」の数値はASよりもぐんと小さく、Bがそもそも居心地のよさをもっていることがわかる。おそらくAは、Bとの間主観的關係のなかでそのようなBの感性の影響を受け、結果、MCWTの作品はその方向に「引っ張られた」のではないだろうか。あるいはAがBの感性を積極的に「取り入れた」と考えることもできる。

このような「取り入れ」(introjection) は、事例BDEFにおいてもみられた。BM「活動性」、DM「まとまり」、EM「居心地」「活動性」「まとまり」、FM「活動性」において、それぞれ相手の単独コラージュの評定値のほうに引っ張られて高く (FM「活動性」は低く) なって

た。

とくに、EM「没入感」とFM「没入感」はその影響が大きく、相手の単独コラージュの評定値を「超えて」EMは低く、FMは高くなっていた。これは相手の感性を取り入れるだけでなく、さらにそれを自分のなかで強く感じたことを意味する。ここではこのような特徴を「拡充」(amplification) と呼んでおこう。

さらに興味深いことがある。再び事例Aを見てみよう。「活動性」は、ASよりもAMにおいて高くなっており、Aが単独コラージュよりもBとの共同制作において、作品の「活動性」を感じたことがわかる。しかしここで、相手Bの単独コラージュ (BS) を見ると、「活動性」はASよりもぐんと低く、Bがそもそも活動性をもっていないことがわかる。

上述の「取り入れ」が機能するなら、AMの「活動性」はBSのほうに「引っ張られて」低くなるはずだ。しかし、結果は逆に高くなっている。いってみれば、AもBも活動性が低いのに、そのような二人が共同制作することで、活動性が生まれている。同様の現象は、CM「居心地」とDM「活動性」においてもみられた。相手や自分の感性にない表現、二人のリソース (持ち味) を超えた変化。これはどのように考えたらいいのだろうか。

心理療法においては、セラピストとクライアントの両者にとって思いがけないことが起こり、それが転機になることがある。岩宮・河合 (2009) の事例をあげてみよう。クライアントの女性は重い無気力を主訴に精神科にやってくる。夢分析を始めると、その淡々とした生活とは逆に、夢のなかでは強い感情が表現される。ところがしばらく経つとクライアントは夢を報告しなくなり、治療者は面接中に強い眠気に襲われる (もちろん睡眠不足ではない)。この時期を経て、クライアントは箱庭に興味をもつなど、新たな展開が生まれる。河合は、「ここで

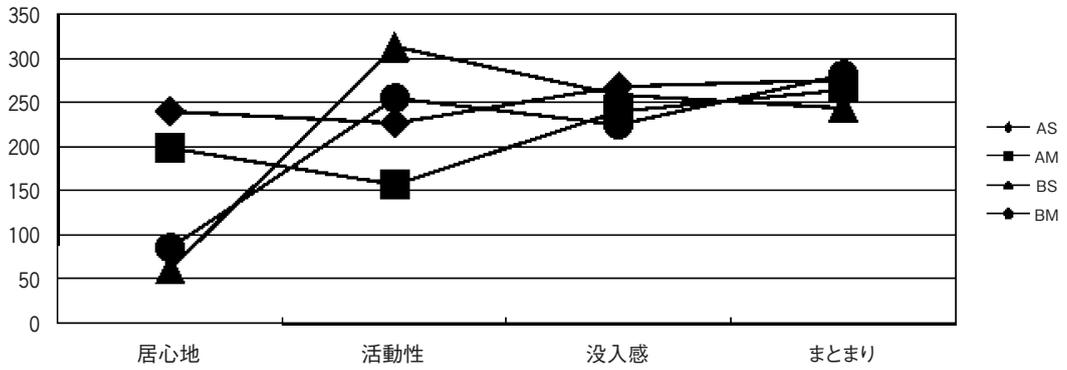


図1 事例ABにおけるSD法評定値

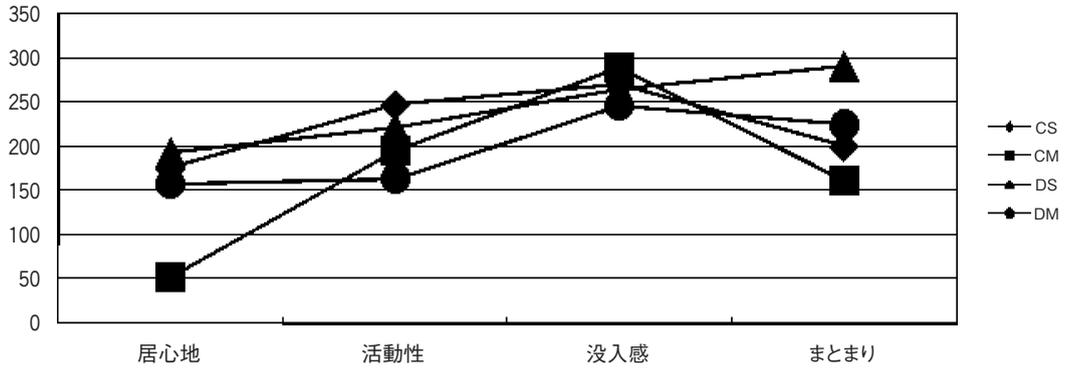


図2 事例CDにおけるSD法評定値

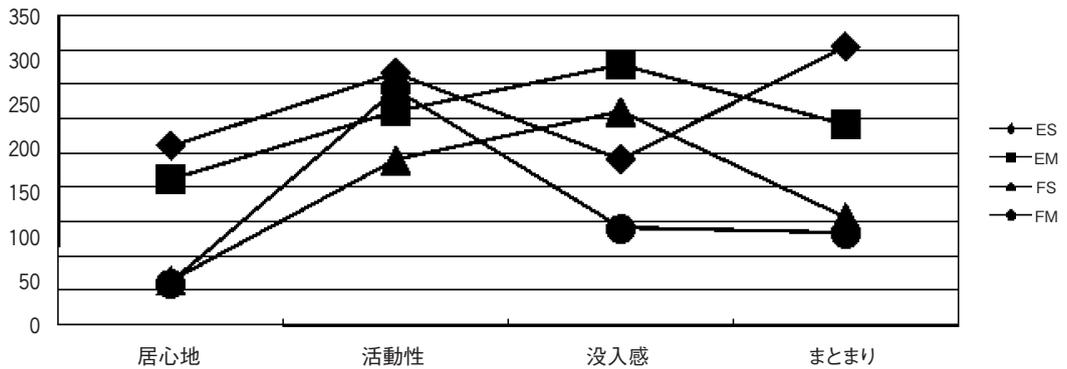


図3 事例EFにおけるSD法評定値

3ヵ月にわたって治療者がしんどくなったところは絶対に必要だったと思う。ここのプロセスを通ることで、やっと少し、この人（注：クライアント）は癒されてくるのである」とコメントしている。

このように、セラピストやクライアントの意図を超えたところで、偶然や意外なできごとが起こり、それが治療の重要な契機になることはしばしばある（注4）。つまり間主観的關係には、二人の持ち味を超えた新たな変化や第三の方向性をもたらす可能性があるのだ。ここではこのような特徴を「意外な展開」（unexpected turn）と呼んでおこう（注5）。もちろん今回のMCWTで、そこまで大きな変化が生じたとも考えにくいですが、心理療法のプロセスに重なる特徴として記しておきたい。

以上で見いだされた各事例におけるMCWTの特徴を、表1にまとめておく。

表1 間主観的關係からみたMCWTの特徴

| | 居心地 | 活動性 | 没入感 | まとめ |
|----|-----|-----|-----|-----|
| AM | 取入 | 意外 | なし | なし |
| BM | なし | 取入 | なし | なし |
| CM | 意外 | なし | なし | なし |
| DM | なし | 意外 | なし | 取入 |
| EM | 取入 | 取入 | 拡充 | 取入 |
| FM | なし | 取入 | 拡充 | なし |

取入：相手の感性を取り入れた表現

拡充：相手の感性を大きく取り入れた表現

意外：相手や自分の感性にない表現

なし：相手の影響なし（単独制作と同じ）

V. おわりに

本小論では、SD法による評定を用いることで、単独コラージュと比較しながら、MCWT作品の特徴を考察した。その結果、間主観的關係において、「取り入れ」「拡充」「意外な展開」といった特徴を確認できた。あわせて「意外な展開」が、心理療法のプロセスにおいて重要な契

機になることにも言及した。本小論ではSD法の評定値だけに注目したが、間主観的意識の本来の意味からいえば、二人のナラティブをあわせて考察するとよいだろう。

注

1 スターン（Stern, 2004, p.125）は、二人が「現在の瞬間」（present moment）を共有しながら、体験を間主観的に共同生成しているとき、一方の現象学的意識は他方のそれと全部あるいは一部が重なっているという。それは、まさに心理療法のなかで生じていることだと、彼は指摘する。筆者はこのような間主観的關係こそMCWTの特徴ととらえ、作品の解釈も、原法のような象徴解釈を採用せず、間主観的意識で感じられた意味を手がかりに、理解を深めるのがよいと考えるようになった。この点については、ユング派である岩宮・河合（2009）も、（単なる象徴解釈ではなく）「クライアントが無意識の深いところとつながっていきこうとしているその部分に自分（注：セラピスト）も入っていくということが大切なのである」（p.48）と述べている。

2 (1)イメージの産出（表現）、(2)相手（セラピスト）のイメージの取り入れ、(3)イメージの吟味（取捨選択）、(4)方向づけ（配置）といった要素である。

3 たとえば鯨岡（1999）は、「この間主観的な把握は、関わり合う二者の双方に生じ得るから、そのときの対人関係は間主観的な関係と呼んでもよからう」（p.129）と述べている。ただし、最近の鯨岡（2006）は、間主観性が「いまここでの直接的伝播というタイトな考え方」（p.135）になりがちだったことをふまえ、「相手を主体として受け止める」（p.132）ことを強調した「相互主体性」（あるいは相互主体的な関係）という言葉を用いている。すなわち、「相互主体的な関係が（中略）全

体として覆っていて、その関係のなかに折々に間主観的に繋がれる局面が現れると考える」(p.135)。したがって、もし「間主観的にしっかり分からない場面でも、相手を主体として受け止めることが、その関係の展開に重要な意味をもってくる」(p.141)という。

4 このほかにも岩宮・河合(2009)は、クライアントが深い夢を報告した次の回に、大雨でキャンセルになったというエピソードをあげている。河合は、「治療がうまくいく人というのは、ストップをかけなくてはならないときにちゃんと雨が降ったりする。本当に不思議であるが、うまくいく人というのは自然も味方をするのである」(pp.40-41)とコメントしている。

5 したがってMCWTの制作過程を、(1)イメ

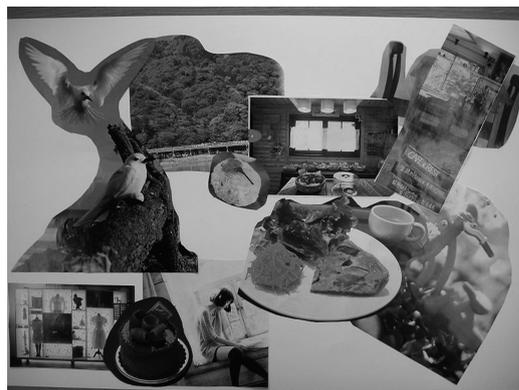
ージの産出(表現)、(2)相手(セラピスト)のイメージの取り入れ、(3)意外な展開、(4)イメージの吟味(取捨選択)、(5)方向づけ(配置)の5つでとらえることもできるだろう。



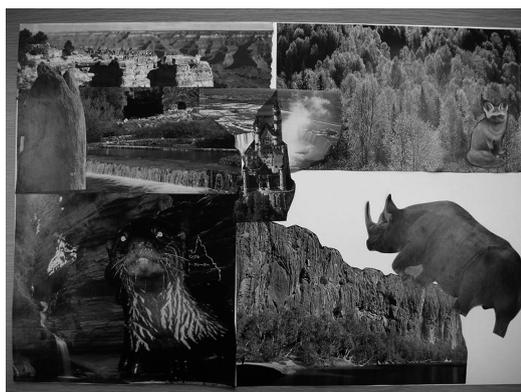
作品ES (単独)



作品AS (単独)



作品EM (MCWT)



作品AM (MCWT)

文献

Daniels, M. (1996-) *Michael Daniels Homepage*. Retrieved from <http://www.mdani.demon.co.uk>

Daniels, M. (2004) *Self-Discovery The Jungian way: The watchword technique, Revised ebook edition*. www.mdani.demon.co.uk

岩宮恵子・河合隼雄(2009) 家を背負うということ：無気力の裏に潜むもの。谷川俊太郎・鷺田清一・河合俊雄編『臨床家河合隼

- 雄』岩波書店, pp.15-55.
- 鯨岡峻 (1999) 『関係発達論の構築：間主観的アプローチによる』ミネルヴァ書房.
- 鯨岡峻 (2006) 『ひとがひとをわかるということ：間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房.
- 申崎真志 (2004) 心理的支えから見たウォッチワード・テクニック. 『同志社女子大学生活科学』第37号, 43-48.
- 申崎真志 (2007) 相互ウォッチワード・テクニック (Mutual Watchword Technique) の試み. 『関西大学文学部心理学論集』第1号, 11-18.
- 申崎真志 (2009) 相互コラージュ・ウォッチワード・テクニックの試み. 『関西大学文学部心理学論集』第3号, 1-4.
- 永山智之 (2009) 二者関係から三者関係に移行する場面における主観的体験の変容. 『心理臨床学研究』26(6), 741-747.
- Stern, D. N. (2004) . *The present moment in psychotherapy and everyday life*. Norton. [奥寺崇監訳、津島豊美訳 (2007) プレゼントモーメント：精神療法と日常生活における現在の瞬間 岩崎学術出版社]